

## 伊藤亮太郎と名手たちによる弦楽アンサンブルの夕べ Vol.3

無観客・有料生配信コンサート

2020/9/11(金) 19:00開演

ヤマハホールからオンライン生配信

## Program

## L.v.ベートーヴェン／弦楽三重奏曲 ハ短調 Op.9-3

Ludwig van Beethoven(1770～1827)/String Trio in C Minor Op.9-3

Allegro con spirito

Adagio con espressione

Scherzo:Allegro molto e vivace

Finale:Presto

伊藤亮太郎(バイオリン)、柳瀬省太(ビオラ)、横坂 源(チェロ)

## W.A.モーツァルト／弦楽五重奏曲 第3番 ハ長調 K.515

Wolfgang Amadeus Mozart(1756～91)/String Quintet No.3 in C Major K.515

Allegro

Menuetto:Allegretto

Andante

Allegro

伊藤亮太郎／横溝耕一(バイオリン)、柳瀬省太／大島 亮(ビオラ)、辻本 玲(チェロ)

— 休憩 —

## J.ブラームス／弦楽六重奏曲 第2番 ト長調 Op.36

Johannes Brahms(1833～97)/String Sextet No.2 in G Major Op.36

Allegro non troppo

Scherzo

Poco adagio

Poco allegro

伊藤亮太郎／横溝耕一(バイオリン)、柳瀬省太／大島 亮(ビオラ)、横坂 源／辻本 玲(チェロ)

## Program Note

## L.v.ベートーヴェン／弦楽三重奏曲 ハ短調 Op.9-3

バイオリン、ビオラ、チェロを通常編成とする弦楽三重奏曲は、弦楽四重奏曲から第2バイオリンを割愛した形態だが、作品数が少ないのはクラシック音楽が4声体を基本としているためである。ウィーン時代初期に書かれたルートヴィヒ・ヴァン・ベートーヴェン(1770～1827)の5曲のうち、厳密な意味での室内楽作品は1796～98年に作曲され作品9として一括出版された後半3曲である。その第3曲である本作は3作中最も緊密な構成を持つ傑作で、ベートーヴェンがこの時期特に好み、翌年の『悲愴』ソナタや5年後のピアノ協奏曲第3番、その数年後の『コリオラン』序曲や交響曲第5番にも選択したハ短調という劇的な調で書かれ、強い感情表現が迸っている。彼は本作を最後に弦楽三重奏曲から離れ、弦楽四重奏曲分野に乗り出していく。

第1楽章 アレグロ・コン・スピリット、ハ短調、6/8拍子、ソナタ形式。求心力に満ちたユニゾンの下降主題から開始され、激情的な推移句を経て温和な第2主題が示される。

第2楽章 アダージョ・コン・エスプレシオーネ、ハ長調、4/4拍子。ソナタ形式。展開部ではビオラが対旋律を歌う。

第3楽章 スケルツォ:アレグロ・モルト・エ・ヴィヴァーチェ、ハ短調、6/8拍子。激しく主張するスケルツォ。やや温和なハ長調のトリオを持つ。

第4楽章 フィナーレ:プレスト、ハ短調、2/2拍子、ソナタ形式。鋭い主題に始まり情熱的に高揚するが、最後はすべてが解き放たれ、ハ長調にあっけなく終結する。

## W.A.モーツァルト／弦楽五重奏曲 第3番 ハ長調 K.515

弦楽五重奏曲には弦楽四重奏にビオラをもう1挺補強した編成と、チェロをもう1挺加えた編成とがあり、稀にコントラバスを加えた編成もあるが、ヴォルフガング・アマデウス・モーツァルト(1756～91)の場合はビオラを加えたものを初期に1曲とウィーン時代後半に5曲の全部で6曲作曲した。15年間もこの曲種を書かなかつたのに、この時期になって集中的に取り組んだのは、経済苦境を打開するための予約出版目的ではなかったかと考えられている。1787年4月19日に作曲された本作は同年5月16日作曲の第4番ト短調と並んで彼の室内楽作品の最高峰と目されている。4つの楽章の総計1149小節という規模も、彼の器楽作品全曲中でも最大のものとなっている。

第1楽章 アレグロ、ハ長調、4/4拍子、ソナタ形式。内声3者の刻みによって第1バイオリンとチェロが掛け合う第1主題から曲を開始する。

第2楽章 メヌエット:アレグレット、ハ長調、3/4拍子。重厚さと諧謔味を兼ね備えたメヌエット。トリオはハ長調。

第3楽章 アンダンテ、ハ長調、3/4拍子、ソナタ形式。第1バイオリンと第1ビオラが仲睦まじい対話を交わす。

第4楽章 アレグロ、ハ長調、2/4拍子、ロンド風のソナタ形式。8分音符に伴奏された晴れやかな主題に始まる。

## J.ブラームス／弦楽六重奏曲 第2番 ト長調 Op.36

バイオリン、ビオラ、チェロ各2による弦楽六重奏曲をヨハネス・ブラームス(1833～97)は2曲残した。この第2番は1864年から65年にかけての所産ながら、構想は数年前に遡る。その構想過程の1858～59年、彼は大学教授の娘アガーテ・フォン・ジーボルトと恋に落ち結婚を決意しかかったが、最終的に彼女との結婚に踏み切れなかった。この曲の第1楽章の第2主題終結部に織り込まれた「A-G-A-H-E音型」は彼女との恋愛の記念碑という説がある。そのため曲はアガーテ六重奏曲の愛称を持つ。

第1楽章 アレグロ・ノン・トロppo、ト長調、ソナタ形式。ビオラのさざ波のような刻みに導かれてバイオリンが第1主題を歌いだす。第2主題はチェロから歌われバイオリンに反復されるが、その終結部に「A-G-A-H-E音型」が何度も現れる。

第2楽章 スケルツォ、ト短調。憂いを帯びたハンガリー風の主部と、軽快な舞曲風の間部からなる。

第3楽章 ポコ・アダージョ、ホ短調。主題と5つの変奏からなる変奏曲。

第4楽章 ポコ・アレグロ。穏やかな第1主題と明るく輝かしい第2主題によるソナタ形式のフィナーレ。

[萩谷由喜子]